

第4回蔵前ゼミ印象記

渡部さん： Fujitsu ソフトウェア&ソリューション研究所で一部門を率いるまでになる経験談を通して、「上司を説得しないことには ことは動かない」ということを力説された。渡部さんは もともと（本能的に）ロボットに惹かれていたので、先ず人工知能を手掛け、その延長として Data mining や Text mining の分野で仕事をするようになったそうだ。Fujitsu の研究所では 2~3 年に一度ダイナミックな再編が行われる。この荒波を乗り切り、自分たちのプロジェクトを遂行するためには、魅力的なネーミングも不可欠とのこと。その具体例が本日の主題であるナレッジマイニング Knowledge mining だ。確かに Knowledge mining というと Text mining をより高度化したイメージが自然に湧く。Knowledge mining の手法を日本航空 JAL に売り込む時にはリスクマイニング Risk mining という表現で説得したのもさすがである。膨大なパイロットの業務日誌や日頃のヒヤリハット報告をコンピュータに“読み解かせる”ソフトを共同開発中で、ある空港で似たようなヒヤリハットが特定の季節に起きやすいことを見つけ、それが西風（季節風）の影響であることを明らかにした例を実演で示されたのも印象に残った。余談だが、私たちの脳も自然を読むために設計された高度な Knowledge mining システムに違いない。

荒牧さん： “計算尺” 世代にはジーンとくる話だった。電卓すらなかった時代に計算尺を片手に化学プラント設計の計算をするのはさぞ大変だったろう。私も 学生時代は土日の大部分を計算尺と格闘しながら過ごした。今のような PC があれば、上諏訪の人と諏訪湖のほとりでデートを重ねる余裕もあったかもしれないという思いにふけていたうちに、気づくと話は本題に入っていた。主題は、「私たち国民が財政赤字を正しく認識し、国の借金に私たちは国民が返すしかない」という単純明快かつ厳粛な事実を受け止めてほしい、そして、いち早く必要な決断と行動をすべきだという日本再生のための提言だった。確かに、政治家が借金をし、その借金を返すのも政治家だと思込みがちだ。巨大化した社会システム、これを理解している政治家や官僚がいない。誰が見ても国会議員が多すぎるのに、その定員を削減する法案は話題にもならない。国会議員が自ら 自分たちの定員を減らすという提案をしてはじめて本物といえるといった具合で、なかなか説得力があった。「日本国ヤリクリのカラクリ」の詳細については荒牧さんの著書に詳しいので ここでは省略するが、 寄贈いただいた著書を図書館のペリパトス文庫に入れておくので御一読を。要は、1000 万円の赤字を抱えた人が、月収 50 万円にもかかわらず、毎月 80 万円使って生活しているのが 今の私たち日本人だと理解できる。こんな生活を続けたらどうなるか分かりますよね。無駄なことはしない； いや、してはいけない。そして私見ですが、生物のシステムを参考に究極的な効率化を目指す以外に道はないのでは。

(参考) 荒牧さんが言及した本：

「地球温暖化」論に騙されるな！（丸山茂徳，本学教授）

「目覚めよ！日本—ニューエコノミーへの変革」（中前 忠，Hamish McRae）

（推敲していないメモです。生命理工学研究科長 広瀬茂久）